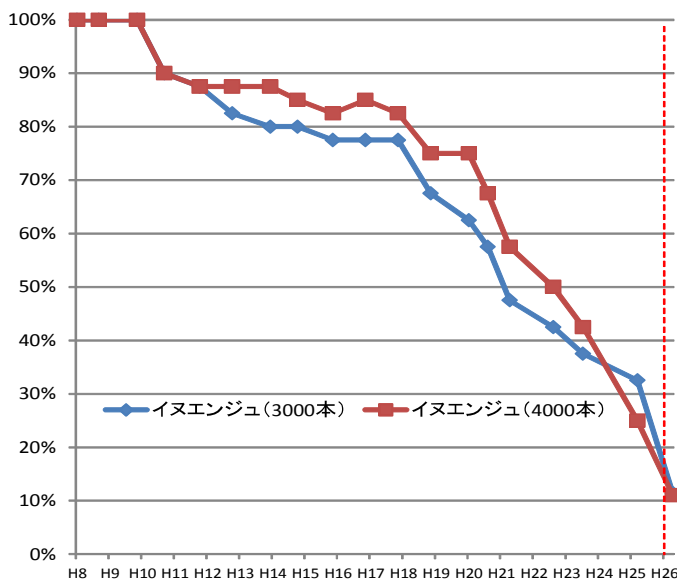


樹種名	イヌエンジュ		
科 目	マメ科		
学 名	<i>Maackia amurensis</i>		
分 布	北海道、本州（関東・中部地方以北）の山地や丘陵の日当たりの良い落葉広葉樹林に散生している。		
樹木特性	陽樹であり、山地や林縁や川岸など、肥沃な日当たりの良い適潤地を好む。		
用 途	材は堅く緻密である。心材は暗褐色、辺材は淡黄白色で心材と辺材の対比が美しく床柱は珍重される。家具・菓子器・彫刻・おもちゃ材に利用。	  	
植栽本数/面積 （植栽密度）	839 本／ 0.18ha （3,500 本・4,000 本／ ha）		
特 徴	【樹 形】 マメ科の落葉高木で、高さ 10~15m となり、葉は奇数羽状複葉、小葉は 7~11 枚、卵形で長さ 4~8cm。7 月から 8 月にその年に伸びた枝の先に複総状花序を出し、蝶形花（ちょうけいか）を多数つける。 花は白く長さ 10~12mm、蝶形花冠の旗弁（きべん）は強く反り返り、10 本の雄しべは基部まで離生する。 豆果は広線形で扁平（へんぺい）、長さ 4~8cm、上側の縫合線に沿って狭い翼がある。種子は 3~6 個。 庭木とされ、材は環孔材で重く堅く緻密で美しくねばり強いので床柱、あるいはシタンの代用として家具、細工物に使われる。心材は暗褐色、辺材は淡黄白色で心材と辺材の対比が美しく床柱として珍重される。		
試験地での様子	ポット苗を植栽し、植栽後コウモリガやカミキリムシ類による穿孔被害が発生した。また、環境の要因が原因と考えられる枯死も見られた。 植栽から 18 年を経過した平均樹高は 4m 程度となっており成長は早いとはいえず、現存率も 11 %と低い結果となった。		
被 害	コウモリガやカミキリムシ類による穿孔被害が発生した。 （延べ駆除本数 コウモリガ 44 本、カミキリムシ類：3 本）		

イヌエンジュ 現存率



【現存率】

植栽後からコウモリガやカミキリムシ類の穿孔被害により枯死が発生している。

◆ 3,000 本／ha：調査数 40 本、生存数 12 本、生存率 30 %

◆ 4,000 本／ha：調査数 40 本、生存数 9 本、生存率 23 %

◆ 計：調査数 80 本、生存数 21 本、生存率 26 %

平成 26 年度に毎木調査を実施した結果、現存率は 11.4%であった。

※ 赤線は、選定した調査木から毎木調査へと測定方法を変更のため、データの連続性はない。

【根元・胸高直径】

現存木は徐々に成長しているが、成長は遅い。

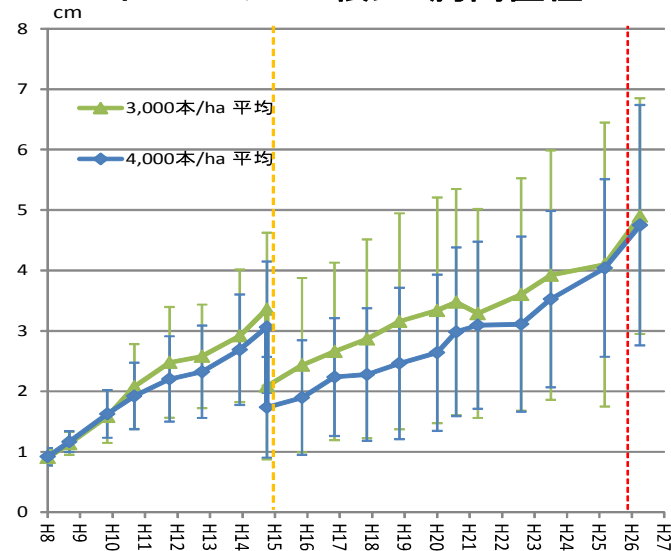
3,000 本／ha、4,000 本／ha とともに大きな差は見られない。

平成 26 年度に毎木調査を実施した結果、3,000 本／ha の平均胸高直径は、4.90 cmであり、4,000 本／ha の平均胸高直径は、4.75 cmであった。

※ 赤線は、選定した調査木から毎木調査へと測定方法を変更したため、データの連続性はない。

※ オレンジ線は、根元から胸高へと測定箇所変更のため、データの連続性はない。

イヌエンジュ 根元・胸高直径



【樹 高】

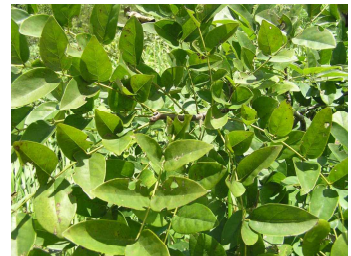
現存木は徐々に成長しているが、成長は遅い。

3,000 本／ha、4,000 本／ha とともに大きな差は見られない。

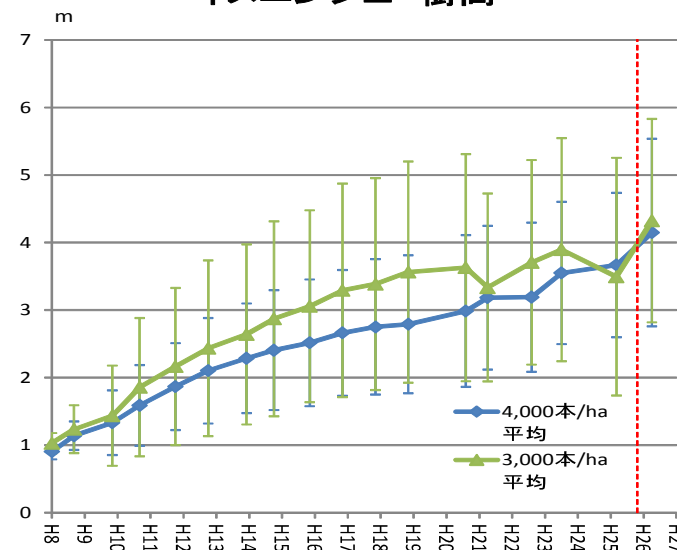
平成 26 年度に毎木調査を実施した結果、3,000 本／ha の平均樹高は、4.32m であり、4,000 本／ha の平均樹高は、4.15m であった。

※ 赤線は、選定した調査木から毎木調査へと測定方法を変更したため、データの連続性はない。

。



イヌエンジュ 樹高



《プチ情報》

イヌエンジュは、エンジュに似て非なるものの意味でこの名があるが、古来エンジュとよばれていたものは本種であって、中国から渡来した槐(えんじゅ)いわゆるエンジュと混同されるようになり、これを避けるために本種に「イヌ」をつけて区別するようになったものらしい。いまでも地方によっては両種を混同している所がある。

イヌエンジュを床柱材目的として植栽するには、次のような注意が必要といわれる。

①若い主幹がややジグザグに伸長し枝張りが広いから、疎に植えると通直な幹を得にくい。②列植えが望ましくイヌエンジュと他樹種を列状に混交させる。③苗間 1 m、列間 2 m くらいとし、順次除伐していく。④無節材を得るため枝が細いうちに早めに枝打ちをしていく。

エンジュは中国原産で日本に伝来し、街路樹や庭木として栽培された。